國學院大學学術情報リポジトリ

〔報告〕「たまプラーザ宇宙の学校 2019」報告：10年目を迎えて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 紀子, 柴崎, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001401

〔報告〕

「たまプラーザ宇宙の学校 2019」報告

―10年目を迎えて―

堀江　紀子　　柴﨑　和夫

【要旨】

國學院大學人間開発学部学部活性化事業「花咲くプログラム」の１つである「たまプラーザ宇宙の学校」を、平成22年度から横浜たまプラーザキャンパスにて開催している。NPO法人「子ども・宇宙・未来の会」（KU-MA）およびJAXA宇宙教育センターとの共催事業でもある。10年目となる本年は、キャンパス内工事の影響で会場の確保が難しく、小学校１、２年と保護者を対象とした午前の部のみで、全３回の開催となった。

本報告は、学生スタッフの動きを中心に、実施プログラムの概要、参加者の感想、そして学生自身の振り返りをまとめた。

【キーワード】

理科教室　親子共同学習　地域貢献

１．はじめに

「たまプラーザ宇宙の学校 2019」の定例報告である。10年目を迎えた本年も、教員はサポート役に徹し、学生を主体とした活動を目指した。運営を牽引していくのは３年生であり、今年度の１年生から３年生までの登録スタッフは98名であった。

2018年11月より横浜たまプラーザキャンパスのリニューアル工事が始まり、工事開始当初は、2019年度に「たまプラーザ宇宙の学校」を開催することができるかどうかが危ぶまれた。工事の進捗状況を鑑みて、開催場所として、学生が普段利用したことがない５号館多目的ホールを最終的に確保した。しかし、前期期間中の日曜日の午前中だけ、３回の使用に限られたため、小学校１、２年生と保護者のみを対象として行うこととした。

なおこれまでの経緯については、昨年までの報告[3)4)5)6)7)8)9)10)11)]を参照して頂きたい。

２．「たまプラーザ宇宙の学校　2019」の概要

１）対象と開催回数：小学１、２年生と保護者50組　全３回

２）広報：本学部HP[1)]、子ども・宇宙・未来の会（KU-MA）HP[2)]、
　近隣小学校５校１年生および２年生約1000人への募集チラシ配布

３）応募状況：140組（抽選で50組に）

4）登録学生スタッフ：98名（１年生53名、２年生18名、３年生27名）
5）主催：國學院大學人間開発学部 宇宙の学校プロジェクト
　共催：NPO法人「子ども・宇宙・未来の会」（KU-MA）、JAXA宇宙教育センター
　後援：横浜市青葉区
6）会場：たまプラーザキャンパス５号館多目的ホール
7）企画実施状況

表１　各回の実施状況（すべて日曜日）

	第１回　5/26 開校式	第２回　6/30	第３回　7/21 閉校式
開催場所	５号館多目的ホール	５号館多目的ホール	５号館多目的ホール
ミニ講演 お話	宇宙の学校とは	木星と土星の話 ロケットクイズ ブーメランの話	ペルセウス座流星群の話 紙飛行機とカタパルト
プログラム1	熱気球	傘袋ロケット	カタパルト紙飛行機
プログラム2		ブーメラン	レポート発表
参加者数	45組94人	41組86人	34組74人
スタッフ	30人	29人	37人

昨年同様「たまプラーザ宇宙の学校 2019」開催の様子は、國學院大學人間開発学部のホームページとKU-MAのホームページで確認できる。最終回に参加児童が発表した、家庭で実施した実験・工作のレポートも、KU-MAのホームページに、これまでの分も含めすべてが掲載されている。

8）“たまラボ”としての参加企画（たまラボについては次節で詳述する）

表２　10/27（日）【第11回共育フェスティバル】における参加企画実施状況

プログラム	きらきら広がる不思議な世界
場所	410教室
時間	第１回10:30－11:30　第２回11:35－12:35 第３回13:25－14:25　第４回14:30－15:30
定員	各回25名　整理券配布
参加者数	全４回　合計83人 （第１回26人、第２回20人、第３回18人、第４回19人）
スタッフ	12人

２．１　学生スタッフ組織作り

今年度は代表を３年生２名とした。登録スタッフ数は約100名と過去最高となったが、スクーリングは３回しか行うことができないうえに、午前中のみの開催である。学生のやる気を維持しつつ、この数のスタッフをどう動かしていくかが、今年度の３年生の課題となった。そこで、回

数も少ないので、初回から１、２年生の中で参加意識が高く積極的な学生に、３年生と共に各回のリーダーとして、全体を統括する活動してもらうこととした。

昨年11月以降の組織づくりにおいて、学生たちは当初スクーリング以外の活動にも意欲を見せた。「宇宙の学校」® はKU-MAの登録商標であり、参加登録者が数回のスクーリングを通して、自然や科学の不思議に気づき、家庭においても親子で実験を行うことを目的とした活動である。そこで、“宇宙の学校”としてではなく、学外での活動も視野に入れて“たまプラーザラボラトリー”としてサークル化する案が持ち上がった。サークル化については紆余曲折があり、いまだ申請には至っていないが、共育フェスティバルなどのスクーリング以外での学生の活動は「たまプラーザラボラトリー（通称たまラボ）」として行うこととした。

３．対象参加者について

昨年度まで小学１、２年生と保護者66組を対象とした午前の部と、小学３、４年生50人を対象とした午後の部を、全５回実施していた。しかし、今年度は工事の関係で５号館多目的ホールを使用することとなった。多目的ホールは体育館のような会場だが、これまでの教室より細長く、最適な活動状況を考えると、各班10組ずつ５班であろうということとなり、50組の募集を行った。140組の応募があり抽選を行った。

例年より小規模開催のため、募集の周知は、毎年行っている「広報よこはま青葉区版４月号」への掲載は行わず、WEB上での募集と、近隣小学校５校の協力を得て、対象学年全員へのチラシ配布を行った。参加者の居住地域は、横浜市では青葉区が中心だが、川崎市、相模原市、江戸川区、鎌倉市の小学生の応募もあった。

４．プログラムについて

４．１　全３回通常プログラム

「たまプラーザ宇宙の学校」のテーマが『飛ぶ、飛ばす』こと、である点は例年通りであった。今回全３回のスクーリングで行ったプログラムは表１のとおりである。各班10組ずつ５班で活動を行った。会場は、これまで横浜たまプラーザキャンパス１号館内各種教室と体育館アリーナを使用してきたが、前述のように工事の関係で、今年度は５号館多目的ホールを使用した。

第１回：開校式の後、例年のように1200Wの家庭用ドライヤーで上げることができる「熱気球」を制作した。例年１班ずつ順番に上げていたが、昨年度試みに、１度上げたのち２度目に６班で一斉に上げてみたところ、６個の気球が体育館アリーナを浮遊する姿は壮観で、参加者の反応も大変良かった。しかし２度目の打ち上げだったため、気球の中に入った空気が冷えたまま抜けず、上手く上がらない班があった。この反省を受けて、今年は最初から６班同時に上げようということとなった。ところがドライヤーで熱風を入れ、さあカウントダウンという時になって、同じ壁際３つの班が使用していた３か所のコンセントのブレーカーが落ちたのである。安全を考えて各

コンセントからはドライヤーを１つずつ使用していた。後日分かることだが、壁際の３か所のコンセントは合計電気容量が20Aであった。５号館多目的ホールは初めて使う会場で、当日は日曜日のため対応できる技術員も居らず、ブレーカーの復旧はできなかった。ほぼいっぱいに膨らんでいた気球はそのまま打ち上げし、これからの班は反対側の壁のコンセントを使い、何とか１班ずつ上げることはできたが、参加者にとっても、学生スタッフにとっても、不完全燃焼な顛末となってしまった。次ページの写真はブレーカーが落ちる直前のもので、どの気球も、ほぼいっぱいに膨らんでいる。

第２回：１つ目の制作は定番プログラム「傘袋ロケット」である。制作の流れは概ね順調であったが、近年、試行錯誤する肝心の考える部分が薄くなってきており、これは会場の狭さに要因することがわかってきた。また、傘袋にパンパンに空気を入れる、という工程の難しさもある。加えて今回は、スタッフがプログラムの楽しさを伝えきれていない、強いて言えばスタッフ自身がその楽しさを実感できていない印象を受けた。肝心の滞空時間をより長く、より遠くまで飛ばせたい、という子ども特有の単純だが一途な熱意を湧き起こすことができていただろうか。スタッフによる簡単だが科学的なアドバイスでより良い方向へ導き、親子で試行錯誤し、お互いが達成感を味わう瞬間があっただろうか。製作工程や手順にばかり気をとられ、「作業」になってしまわぬよう、まだまだ向上の余地はあると感じられた。２つ目は「ブーメラン」の制作を行った。今年度も２枚の帯状の厚紙を十字に重ねて４枚羽とした。投げ方の上手なスタッフがコツを伝授するコーナーも設けて、投げたブーメランが手元に戻ってくる楽しさを伝えた。

第３回：「カタパルト紙飛行機」を制作した。昨年度は割りばしにゴムをひっかけてカタパルトにしたが、今回は紙パックとゴムを利用し、紙パックを外側に開くとゴムの力で紙飛行機が飛ぶ装置を制作した。紙飛行機を飛ばしたことがない子どもが多いので、紙飛行機を飛ばすだけでも盛り上がるプログラムである。カタパルトを制作したのち、まずは飛行機だけを飛ばしてみて、そのあとカタパルトを使って紙飛行機を飛ばしてみた、本来カタパルトの役目は、より遠くへ飛ばすことであるが、手だけで紙飛行機を飛ばすのと、どちらがよく飛ぶかは、微妙なところであった。「レポート発表」は、ほぼ全員の参加者が準備してきており、家庭で保護者と楽しく実験をした雰囲気が伝わってくる発表が多かった。

＜全３回スクーリング開催の様子＞

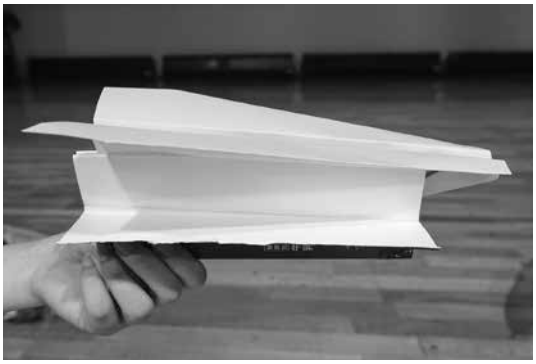
第１回『熱気球』

第２回『傘袋ロケット』

第２回『ブーメラン』 宇宙でブーメランを飛ばすと戻ってくるのかな？

第２回『ブーメラン』 投げ方のコツ

第３回『カタパルト紙飛行機』 まずは紙飛行機を飛ばしてみる



第３回『カタパルト紙飛行機』

第３回『レポート発表』

４．２　スタッフによる番外編プログラム

通常開催のスクーリング以外に、例年スタッフが、「共育フェスティバル」に参加して企画を出している。10/27（日）の第11回共育フェスティバルでは、たまプラーザ宇宙の学校スタッフに登録している学生が“たまラボ”として、鏡をテーマとした「きらきら広がる不思議な世界」を各回定員25名で４回行った。各回制作と体験に分け、制作では万華鏡をつくり、体験では二面鏡、三面鏡、鏡映描写の３種類の鏡の不思議コーナーを用意した。二面鏡では、予算の許す限り姿鏡を購入し、合わせ鏡の通路を作成。映ったものがどこまでも続く不思議を体験してもらった。三面鏡では、被服室の三面鏡を使用し、子どもは完全に中に入り、保護者は上からのぞき、その映り方の不思議を体験した。鏡映描写は、心理学実験で使う装置を用い、鏡に映った星型図形を鉛筆でなぞるものである。子どもだけでなく保護者もチャレンジして、簡単そうな見た目とその難しさのギャップを楽しんでいた。万華鏡は、トイレットペーパーの芯と紙パック、キッチン・アルミシート、ビーズなどを使い、20分程度で手軽にできる制作である。

整理券の配布は午前中に終了し、全４回で合計83人が参加した。

５．学生スタッフの反応

質問「どのような姿勢でスクーリングに臨み、何を得たか。来年に向けての問題点と改善点」を与え、自由記述とした。20名の学生から提出があった。以下、◆印は学生スタッフによる振り返りの抜粋または略述である。

５．１　１年生スタッフ

◆「子どもと接するときに大切なことは何なのか」について身をもって経験することができた。子ども一人一人に合わせた対応をすることでより距離を縮めることができるという、子どもと接するときのポイントを学び、得ることができた。

◆なるべく多くの子供と接することのできるようにという姿勢で望んだ。始まる前や最中のちょっとした隙間時間に子供に話しかけて、少しでも多く子供との交流を図った。

◆子どもたちだけではなく保護者の方々とのコミュニケーションの方法を学べたということはかなり大きな収穫であると思いました。

◆入学する前から宇宙の学校に入って子どもたちと理科実験を行いたいと考えていたので、私自身楽しんで参加できたと思います。私も先輩のように子どもの「なぜ？」を引き出せる説明やお話ができるようになりたいです。問題点は、保護者の方々が周りでただ見ている授業参観のようになっていたことです。

◆参加姿勢：学年を越えた人間関係を学ぶ。参加者から興味と内容を学ぶ。

得られたもの：参加者との会話から、人それぞれの興味によって、理系の面白さを知った。

◆子どもの学びを、「大学生」としてどう伸ばしていけるのか、という気持ちを持って参加しま

した。自分は自分が思っているよりもまだまだ教える立場として未熟なんだということが分かりました。

◆元々天文学に興味があり、大好きな天文学を教育に生かせる良い機会だと思い参加した。自らの知識と、学外での子供たちと関わる経験を生かし、子供たちに理科に興味を持ってもらうことを自身の目標にした。

◆スクーリング当日はアクシデントや想定通りにいかないことがたくさんあり大変だったが、その疲れを忘れるくらい子供たちの笑顔が可愛くて、参加してよかったと心から思った。

◆入学前から「宇宙の学校」に入るということを決めていた。（中略）多くの子ども達に好奇心揺さぶる「面白い」と「発見」を届け、そして、それを家族で共有できる時間を過ごせる存在であり続けてほしい

◆子供たちから学ぶという姿勢で参加した。子供たちへの声かけはとても大切だと分かった。みんなと違った部分や工夫した点などは褒めることが大切だ。

◆考えを引き出すことが出来るように、自分から教え込まないようにしました。また、子ども達が低学年だったので、その子達がちゃんと理解できるよう説明するようにしました。

◆子どもや保護者に対する接し方を身をもって体験し、学ぶことができる。体験することによって講義で教授の話を聞いて学ぶときより理解を深めることができる。

◆元々実験や工作が好きだったので、この活動を通して子どもと自分の好きな分野で関われるということに魅力を感じた。

５．２　２年生スタッフ

◆「参加者」がきちんと「参加」できるように、自身の視点を企画者だけに固定せず、小学生目線や保護者目線、協力してくれる大学生メンバーの視点でも考えるように気をつけた。

◆３回のスクーリングを通して児童や保護者とコミュニケーションを取り、少しだが信頼関係を築くことができた。

◆２年生という立場でスクーリングに参加してみて、３年生から活動を行う上で注意しなくてはならない点を教えてもらったり、１年生に「宇宙の学校」とは何かを教えたりと、今年度の活動はインプット・アウトプットが多いと感じた。

◆スクーリングが始まるまで自分の班の子どもや保護者とコミュニケーションをとりました。ここでの雰囲気づくりはその後のスクーリングの進行に関わってくるので、積極的に関わりました。（中略）子どもたちから、たくさん話しかけてもらった時はすごく嬉しかったです。

５．３　３年生スタッフ

◆今年は１、２年生のサポートに重きを置きスクーリングに臨んだ。１、２年生は積極的で面白い視点を持っている人が多く、スクーリングのプログラムからの学びの他に、その反省による

学びも多くあり、３回しかなかったがとても勉強になった。安全面への配慮や子どもに対する動機付け、興味のひかせ方などである。教員になった際はこれらのことを活かして何か活動をしてみたいと考えさせられた。

◆私がスクーリングから得られたものは、子どもを見る力ではないかと感じる。３年間スクーリングを行ってきて、子どもが何を思っているのか、何をしたいのかを感じることができるようになった。子どもが不安に感じていることを察し、そばにいてフォローをする事も可能になった。毎回のスクーリングに参加し、子どもをしっかりと見る事で子どもの気持ちを少しでも知ることができた。子どもが不安に感じることだけではなく、子どもが楽しいと感じる瞬間や嬉しいと思う出来事を学ぶことができた。

◆１、２年生スタッフが前で進行しているのを今までより一歩引いて見ると、子どもたち側の視点から見ることができて、わかりにくい言葉の言い回しによって伝わりにくいところや、学生の問いかけで理解が深まっているところなど、全体を相手に進行していたときには気付きにくかったところを見ることができました。子どもの視点に立つことの大切さを改めて感じました。また、一対一で子どもと関わる場面が増えて、発言が少ない子どもに問いかけることで、子どもの言葉や考えを引き出すことができました。サポート側になると保護者の方と話すことができる場面も増えました。学生の子どもとの関わりかたや子どもが楽しんでいる様子が、保護者に安心感や好感を与えることを実感しました。子どものことを考えた言動が子どもだけではなく保護者への信頼感にもつながるのだと思います。

６．開催結果の評価について

今年度も参加者にアンケートをお願いした。簡単に概要を述べる。

参加者対象アンケート回答数：保護者35・児童35

問１）お子さんは何年生ですか？

１年生	17
２年生	18

問２）参加者した保護者の続柄

父	20
母	12
両親どちらか	2
未回答	1

問３）開催情報の入手先

大学HP	1
KU-MA HP	1
その他WEB	1
小学校から	29
友人知人	2

問４）参加回数

１回	0
２回	4
３回	31

問５）応募の動機（記述式） 主な回答

・子どもに宇宙、自然、科学に興味関心を持ってもらいたい　8
・子どもに沢山の経験をしてもらいたい　5
・兄弟が参加したことがあり良い経験になったから　4
・子どもが工作、実験が好きだから　3
・子どもと一緒に参加できるいい機会なので　1

問６）最も気に入ったプログラム

プログラム名	保護者	子ども
熱気球	21	9
傘袋ロケット	6	5
ブーメラン	1	4
カタパルト紙飛行機	7	17

問７）自宅で工作・実験をいくつしましたか

１つ	22
２つ	8
３つ	3
４つ	0
５つ以上	0

問８）「宇宙の学校」に参加して良かったですか

評価	保護者	子ども
とても良かった	32	30
まあまあ良かった	2	4
何とも言えない	0	1
少し期待外れだった	2	0
まったく期待外れだった	0	0

問９）来年も参加したいと思いますか

評価	保護者	子ども
思う	31	28
思わない	0	0
わからない	4	7

問10）感想　主な回答

・よい学びの機会だった
・楽しかった
・また発表の機会を作ってほしい
・熱気球など普段できないことが出来た
・学生スタッフが一生懸命説明していてわかりやすかった
・もう少し仕組みについての話が多いと良い
・考えられる機会が欲しい

7．まとめ　ー次年度に向けての反省と課題ー

今年度はスクーリングの回数が３回と少なく、毎回午前中で終わり、スタッフにとっては残念ながら不完全燃焼の活動となった。工事の関係で、開催場所や回数がなかなか決まらなかったことも初動を鈍らせる結果となった。経験者である２、３年生にとっては、自分たちの思い描いていたような活動ができず、投げやりな空気が漂う時期もあった、けれども、参加してくれる子どもたちや保護者に楽しんでもらおう、何か体験の種を一つ持ち帰ってもらおうと考え、全３回のスクーリングに取り組んでいた。スタッフの参加動機に多いのは、子どもたちと触れ合いたいという気持ちである。スタッフである学生たちは、１年次から３年次にかけて、学生企画委員※1や教育ボランティア、教育インターンシップ※2、教育実習※3を経て学びや経験を深めていく。「たまプラーザ宇宙の学校」プロジェクトでは、子どもだけではなく保護者と接する機会も持ち、学生同士運営方法をめぐってのコミュニケーションも不可欠である。約100名近い登録者のあるスタッフだが、実際に当日参加したスタッフ数は表１のとおり、３分の１にも満たなかった。学生たちは無料通信アプリLINEを利用して連絡や報告、出欠確認を行っているが、既読スルーという言葉があるように、コミュニケーションが薄い関係ほど活動を自分事として捉えない風潮がある。このプロジェクトの方針として、スクーリング当日出られなくても、準備や裏方だけの活動も歓迎している。せっかくの参加意思表明を活動につなげてくれればと思う。

近年続いていた、レポート発表時に参加者が極端に減る、出席してもレポートを持ってこないなどの発表を回避する傾向は、本年はほとんど見られなかった。夏休みを挟まなかったのが１つの要因かもしれない。

今年の夏も例年になく暑かった。会場となった５号館は普段授業に使われておらず、飲料自動販売機が置かれていない。参加者へは事前に水筒・飲み物持参と明記した参加証を郵送していたが、持っていない方がいることも想定し、開始前に入口で購入場所を案内した。会場には冷房が入っていたが、２時間のスクーリング中、飲み物を持参していない子どもがふらふらして「目がちかちかする」と訴えた。保護者に伝えるも対応していただけず、熱中症の症状と運営側で判断してお茶を飲ませ、ほどなく回復した。また、親子でじゃれ合っているうちに頭を床に打ち、額を縫う怪我をした子どもが１名でた。今後も、保護者への注意喚起も含め、熱中症や怪我に十分注意して運営を行っていかなければならないと強く感じた。

昨年11月に新体制がスタートし、学生たちは当初スクーリング以外の活動にも意欲を見せた。「宇宙の学校」® が商標登録されていることから、“宇宙の学校”としてではなく、学外での活動も視野に入れて“たまプラーザラボラトリー”としてサークル化する案が持ち上がった。しかしこの動きも、全３回のスクーリングが終了するとともに立ち消えとなっている。“たまプラーザ宇宙の学校”としての活動は、学部プロジェクトとして教員が関わり、プログラムの進め方にも科学的齟齬がないか気を配っている。これを離れた学生主導となるサークル化“たまラボ”が、

今後どれだけ進展するかは、学生の意欲にかかっている。

8．おわりに

「たまプラーザ宇宙の学校 2019」の開催までの経緯、実施状況、成果、反省点と課題を報告した。次年度については、進行形である横浜たまプラーザキャンパスの再開発による工事がどう進むのか不明の点が多く、どのような形態で開催できるかは未定である。次年度の学生スタッフについては、11月中に代表決めを終え、新体制で活動をスタートしている。学部活性化事業として、大学側と連携し、学生の高い意欲を活かした活動ができるよう、できれば全５回開催に向けて動いていきたい。

最後に、今回のプログラムを成功裏に実施出来たのは、KU-MA事務局五十嵐晴美氏、スタッフ諸氏（下記参照）の献身的な努力の賜であった。教育実践総合センター小笠原優子教授には毎年近隣小学校への連絡を行っていただいている。ここに記して感謝する。

2019年度スタッフ（下線は前年度経験者）

１年　安田深結、阿部友希菜、伊東晃平、伊藤咲季、浦澤明日香、遠藤夏海、大越瑞希、大竹葉子、大野真歩、岡部志音、小野遥可、河出ひかる、喜多村堇、衣笠瑠、久保田結菜、小松美輝、小村すず、佐々木綾子、佐藤桃子、里方俊貴、猪谷若那、渋谷歩、渋谷美結、正田詩織、杉浦舞、勢馬啓吾、関彩音、仙洞田麻衣、髙木玲、髙島菜々子、知屋城育子堤みのり、長澤桃香、中村綾子、西山菜々花、樋口璃音、廣瀬市画、藤江珠郁、藤﨑千福、別宮彩音、細井理沙、保戸田夏惟、堀凛和子、本多遥、増田彩佳、松島うらら、松本塁、嶺井那奈、村山郷太、村山美怜、山口真美子、湯本真由、吉村寧華

２年　荒川稜、荒井まこ、伊藤夏紀、岩井萌、植木生真、尾崎翔、小澤奈央、金廣寿々乃、小泉佑夏、斉藤由佳、座間裕美、髙橋佑季、立花昌典、棚網夏那、中村楓希、西原大智、益子実佳、山田健一郎

３年　安生奈菜、上田結子、上田由紀子、永徳隆典、江藤壮史、尾崎美歩、北川周、小島修哉、佐野凛介、澤田大貴、榛葉敦子、染谷美月、高橋菜々穂、高橋美那、田中萌愛、都築晃輔、十倉日向、新村明子、平尾咲季、藤本智子、船切裕希、堀円香、前田悠貴、松山ななみ、宮田有優、宮村桃香、横山琴音

参考

1）國學院大學人間開発学部ホームページ；https://www.kokugakuin.ac.jp/education/fd/human

2）KU-MAホームページ；http://www.ku-ma.or.jp/

3）柴崎、堀江『人間開発学研究第２号』2011

4）堀江、柴崎『人間開発学研究第３号』2012

５）柴﨑、堀江『人間開発学研究第４号』2013
６）柴﨑、堀江『人間開発学研究第５号』2014
７）堀江、柴﨑『人間開発学研究第６号』2015
８）堀江、柴﨑『人間開発学研究第７号』2016
９）堀江、柴﨑『人間開発学研究第８号』2017
10）堀江、柴﨑『人間開発学研究第９号』2018
11）堀江、柴﨑『人間開発学研究第10号』2019

※１　國學院大學人間開発学会では、学生会員（人間開発学部学生）の修学・活動支援の一環として、学生会員を代表する学生企画委員からなる学生企画委員会が組織されており、学生活動支援委員会（正会員〔本学部専任教員〕で構成）の助言・指導を受けつつ協議を重ね、「人間開発学」に関わる事業の主体的な企画立案・運営を行っている。
※２　本学部において２年次より開講。地域諸学校との連携による実践体験型実習。
※３　本学部において、主免許の教育実習を３年次に行う。

（ほりえのりこ　國學院大學人間開発学部資料室助手）
（しばさきかずお　國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）